

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」(2021年度第3回・通算第3回研究会)

2021年度第3回研究会(通算第3回目)

日時:2022年1月8日(土)13:00-17:00

場所:Zoomによるオンライン開催

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

報告者:安達真弓(AA研)

会の始めに、副代表者である山下里香から「在日・在中コリアンの継承語研究の方法論の変遷についての情報共有を行う」という第3回研究会の位置づけについての説明があった。その後、2件の研究報告と討論が行われた。以下に各報告の要旨と、討論の内容をまとめる。

1. 生越直樹(AA研共同研究員, 東京大学名誉教授)

「在日コリアンの言語使用—量的研究の推移—」

在日コリアンの言語使用に関しては、1980年代以降、様々な量的研究、主としてアンケート調査による分析が行われてきた。各調査の概要を述べながら、研究での成果、残された問題点、今後の研究の方向性について考察した。

各調査の結果から、在日コリアンには地域、学校、組織、宗教を基盤とした様々なサブコミュニティがあり、コミュニティごとに言語使用の状況も異なること、一方で、年上に対して韓国朝鮮語を使用する比率が高いなど、コミュニティに共通する特徴が見られることも明らかになった。しかし、調査対象が民族意識の高い人たちに限定されていること、調査項目の尺度が調査ごとに異なるため調査間の比較が難しいこと、民族意識との関連性について不明な点が多いこと、など問題点も残されている。婚姻形態の多様化や新たな人々の来日など、在日コリアンの状況はさらに複雑化しており、今後は調査対象や目的をより明確にした研究が求められる。質疑応答では、量的調査の可能性と限界、選択肢の尺度の設定などに関して様々な意見が出された。

2. 新井保裕 (AA 研共同研究員, 文京学院大学)

「中国朝鮮族のモビリティとことばをめぐる挑戦」

中国朝鮮族は朝鮮語と中国語のバイリンガルと一般的に考えられ、国内外移動が活発であることが知られるが、両特徴を紐づけるモビリティとことばについて扱った社会言語学的研究は皆無である。本発表では研究方法に焦点を当てて、紙アンケート調査から学校見学・対面インタビュー調査、そしてオンラインインタビュー調査へと変遷しつつある発表者の朝鮮族研究を概観し、調査背景や研究背景を振り返った。結果、研究目的や研究趨勢、調査環境に応じて調査方法を「移動」または併用していることを確認し、今後も様々な変化を敏感に捉えつつ、朝鮮族のモビリティとことばをめぐる挑戦することを報告した。

質疑応答では、朝鮮族の中国社会への「社会化」や、朝鮮族の複言語使用、韓国観などについて質問が成され、朝鮮族に関する議論を深めることができたばかりでなく、週末学校の教育内容、マイノリティ言語とジェンダーの関係などについても、他移民コミュニティ研究から事例紹介や意見があり、朝鮮族だけでなく移民コミュニティ全般について考察する機会となった。

研究会には 15 名 (うち代表者・所員・共同研究員 12 名) の参加があり、盛況のうちに行われた。

以上

(文責・安達真弓)